

朝鮮半島の角筆文献

——架蔵「小学」について——

柚木 靖史

はじめに

朝鮮半島の角筆文献については、その存在が確認されて以来、小林芳規博士をはじめ、日韓の研究者、特に口訣学会の研究者によって進められてきた。その研究の深化は著しいが、まだ解決すべき問題を多く残している。特に、従来、朝鮮半島の角筆研究は、新羅や高麗時代の国宝級の古代の遺物を対象に行われてきた。しかし、筆者は、十七世紀から十九世紀にかけて大量に存する漢籍の角筆文献の研究がなされてこそ、角筆研究の真の発展といえると考ええる。日本において、近世の板本から大量に角筆が発見され、しかも各県から発見されたことにより、角筆文献を利用した方言史の研究の道が開かれたようなことが、朝鮮半島においても今後起こりうるのである。このように、朝鮮半島の角筆文献は、十七世紀から十九世紀の朝鮮語の解明に

とって、重要な資料群となりうるのである。

今般、架蔵の朝鮮半島板の漢籍のなかから、新たな角筆文献が見つかった。架蔵の朝鮮半島の角筆文献については、孟子(a)(b)についてすでに述べたところであるが、朝鮮半島に大量の数の角筆文献が存していることを紹介するためにも、本文献もまた、写真を交えて、解説しておきたい。

一 朝鮮半島板角筆文献「小学」について

本書は、巻一、巻三、巻六を欠く、二冊本である。朝鮮半島で刷られたもので、筆者の架蔵本である。印刷時期は定かではないが、装丁や字体、紙質からみて、十九世紀の印刷と思われる。すなわち李氏朝鮮時代の印刷であろう。

昭和三年十二月二十日の新聞「新愛知」にて表紙、後表紙を補修している。一冊目の表紙に「癸酉年」と墨書されるが、お

そらくは新聞が発行された昭和三年から遠くない「癸酉年」、すなわち昭和八年ではないかと推測される。なお、表紙が、日本発行の新聞によって補修されたことは、当時の政情を鑑みれば、特別のことではなからう。補修表紙には「小学」と直に墨書きされている。「小学」は、宋代に成立したとされる儒学書である。架蔵の「小学」は、六巻のうち巻二、巻五のみが存する。なお、補修された二冊目の表紙には「小学 卷之四」とあるが、本自体は、巻五であつて、表紙墨書の外題と、内題とが異なっている。

第一冊目の元表紙見返しにの墨書は、補修後の表紙の墨書とは、別筆である。元表紙見返しに墨書された「子英陽」なる人物については、定かではない。元後表紙の見返しに「庶子 林 女英陽」とあるから、これを写し取ったものであらう。この元表紙見返しには、刊記があるが、本書の制作者名を羅列するのみで、年紀は記されていない。

本文に書き入れられた墨書は、元表紙見返しにの墨書と同筆であると判ぜられるので、本文中に墨書された口訣も、本書が補修された当時に書き込まれたことになる。墨書の内容は、所謂、口訣であり、本文を読解するための補助として書き込まれたものである。墨書は、二冊ともに、全丁にわたって、詳細に書き込まれている。

本書には、墨書の他に角筆も書き入れられている。角筆と墨

書には関連性は認められず、別人が書き入れたものである。おそらく、角筆は、本書が印刷されて、間もなく書き入れられたものと思われる。後述するが、角筆は、返読線が中心で、本文の漢文を朝鮮語で読む際の、文字の順序を線によって示したものである。日本では、レや一、二、上中下、甲乙を使って漢文を読む際の文字の順序を示すが、朝鮮半島では線によって文字を読む順序を示す。

角筆の線は、目を凝らして、ようやくその存在が知られる程度に薄く浅い。本稿では、角筆の存在を示すべく、写真によりよく写る、比較的、凹みの深いものを示した。

本稿では、写真とそれに対応する箇所の角筆線を手書きの模写で示し、解説を加えながら、本書の角筆について考える。

○朝鮮半島版「小学」の書肆的事項

(一冊目・外題) 小学 (冊数) 二冊

(刷られた年代) 詳細は不明 朝鮮半島十九世紀初め頃の板と推定される

(表紙の補修) 昭和三年発行の「新愛知」によって表紙を補修 (題簽) なし (寸法) 縦三〇糎×横二二・五糎

(二丁分の行数と一行分の文字数) 一〇行×一七字

墨書書き入れあり

(一冊目・内題) 小学諸家集註卷之二

(二冊目・尾題) 小学諸家集註卷之二

(二冊目・補修の表紙・墨書) 癸酉年 月 日

小学大全卷之二

(補修に使われた新聞が昭和三年であることから、その後で昭和三年に最も近い癸酉年である一九三三年を表すと推定される。)

(一冊目・元表紙見返し・墨書) 于英陽 小學

(一冊目・元後表紙見返し・印刷) 庶子 林／子淑徳／子淑道／

子淑恵／子淑敬／子淑智／女英陽／子繼元(以下、補修による糊付けのため判読不能)

(二冊目・補修の表紙・墨書) 小学 卷之四



(二冊目・元表紙・墨書) 小学 肆

(二冊目・内題) 小学諸家集註卷之五

(二冊目・尾題) 小学諸家集註卷之五

二 朝鮮半島板角筆文献「小学」の角筆

「小学」には、角筆により、中止符と返読線が書き入れられている。この中止符や返読線によって、漢文を朝鮮語の語順で読んでいる。この中止符や返読線による漢文読の表示法は、日本での漢文訓読との表示法とは全く異なる。すなわち、日本では、

古来、漢文は、レ点や一、二点、上中下点を使用して、漢文を日本語に読み替えたのであるが、朝鮮半島では、線や符号を用いて、漢文を朝鮮語に読み替えたのである。朝鮮半島式の表示法は、まず上に返って読む漢字となる起点として、その漢字の中央に「」形の鍵線を付し、そこから線を、上に返っていく漢字の右傍まで連続して引くのである。更にその漢字から上に返る場合にも、その漢字の中央に「」形の鍵線を付し、そこから更に上へと線を伸ばし、帰着する漢字の右傍までその線を切れ目なく続けるのである。

小林博士は、高麗時代の角筆文献に角筆の書入れを発見し、それにも同じような返読線があることを指摘された。⁽²⁾その表示方式は、李氏朝鮮時代に至ってもなお、基本的に変化は認められていない。ただし、高麗時代の角筆文献のように、詳密な星点や線は、見出されない。また、高麗時代の返読線は返読する起点となる漢字と返読が帰着する漢字とに付されるのみで、途中は線が途切れるのであるが、架蔵の朝鮮半島板角筆文献は、一続きで途切れない線である。おそらく、時代による変化であろうが、線によって返読を表示するという方式には変わりがない。

朝鮮半島において漢籍は中国式に音読されたという考え方が根強くあった。しかし、角筆の返読線は、朝鮮半島においては、漢籍は自国語の語順で読まれることもあったことを示している。

朝鮮半島において、どのような場合に音読され、どのような場合に自国語の語順で読んだのか、今後考えなければならない課題である。

三 角筆の個別例

ここでは、末尾に掲げた写真と対応させながら、「小学」に書き入れられた角筆の具体例を見ていくこととする。

(1) 写真1

(巻二 9丁表9行目)

不苟訾業不苟笑

解説

「苟笑」の右傍に、「苟笑」が熟語であることを示す「」状の角筆線がある。その角筆線の中央から発し、「不」の右肩に至る角筆の返読線がある。「笑」の中央には、「」状の角筆線がある。この線は、当該字が、返読の起点であることを示す。これらの角筆線を順にたどると、「苟笑不」の順で読むことができる。

(2) 写真2

(巻二 十二丁裏3行目)

子婦人無私貨

解説

「私貨」の右傍に、「私貨」が熟語であることを示す「」状の角筆線がある。その角筆線の中央から発し、「無」の右肩に至る角筆の返読線がある。「貨」の中央には、「」状の角筆線がある。この線は、ここが、返読の起点であることを示す。これらの角筆線を順にたどると、「私貨無」の順で読むことができる。「貨」の右下には、「」状の、墨による中止線がある。その墨書の左側に、角筆で「」状の中止線がある。

(3) 写真3

(巻二 十二丁表5行目)

賜而復與之

解説

「與之」の右傍に、「之」の右下から発し、「與」の右肩に至る角筆の返読線がある。「之」の中央部には、返読の起点を示す「」状の角筆線がある。

(4) 写真4

(巻二 十三丁裏1行目)

父命呼唯而不諾

解説

「不諾」の右傍に、「諾」の右下から発し、「不」の右肩、やや内側に至る角筆の返読線がある。「諾」の中央部には、その返読線の起点を示す「ㄱ」状の角筆線がある。「諾」の下中央には、「ㄴ」状の中止線がある。「諾」の右側下には、墨書にて「ㄴ」の口訣が書き入れられている。

(5) 写真5

(巻二 三〇丁表7行目)

君召

解説

「君」の右下に、「ㄴ」状の中止符がある。同じ形状の中止符は、墨書でも書き込まれている。

おわりに

本稿で紹介した「小学」は、架蔵の朝鮮半島版角筆文献の三点目にあたる。今後も朝鮮半島における角筆文献の発掘に努め、紹介していきたい。

(解説と対応する写真)

写真1



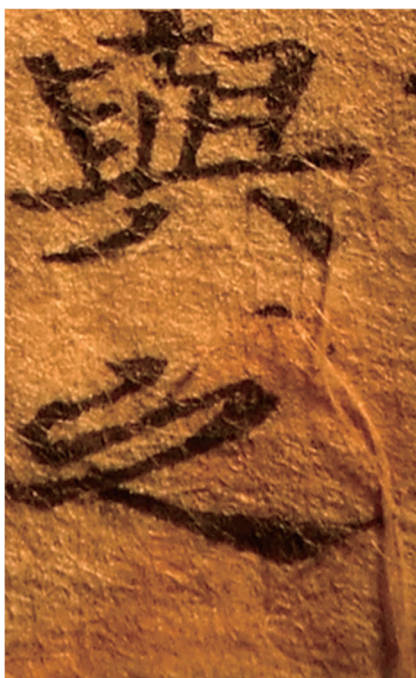


写真
3

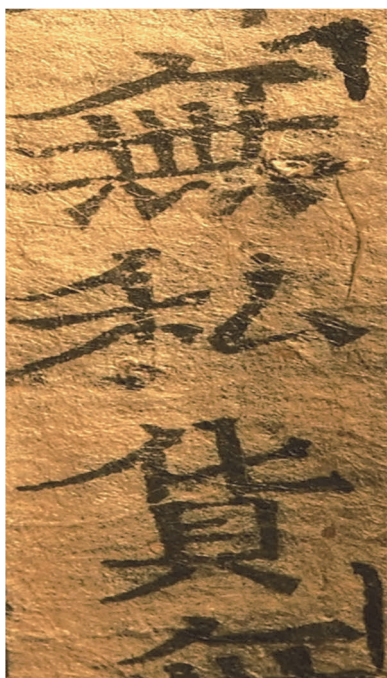


写真
2

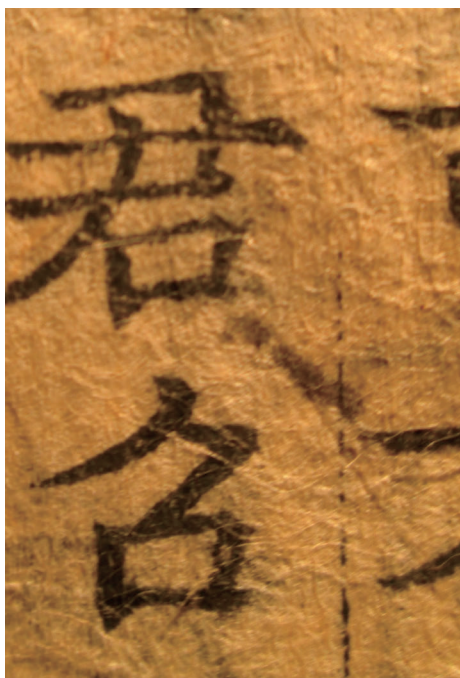


写真
5

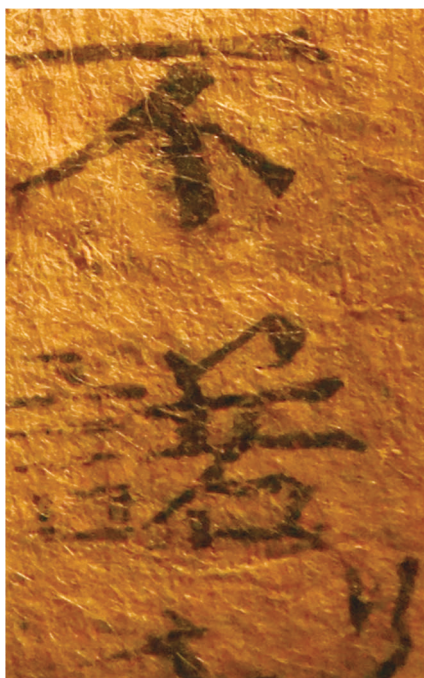


写真
4

(1)

拙稿「角筆文献『孟子』角筆返読線―角筆使用一例―」二〇〇六年十二月（『漢文読法』東文字）

拙稿「十九世紀の朝鮮半島版角筆文献―朝鮮半島における漢文読と角筆の返読線―」（二〇〇九年十二月 山口国文三十二号）

拙稿「写真で見る朝鮮半島板『孟子』の角筆」（『広島女学院大学大学院言語文化論叢』第十七号 二〇一四年）

小林芳規著『角筆文献研究導論』上巻 東アジア篇（二〇〇四年七月 汲古書院）

(2)

Kakuhitsu Documents Printed in the Korean Peninsula——A Study of *Shogaku* (Xiao-xue) Owed in my Library——

Yasushi YUNOKI

Abstract

Kakuhitsu lines are observed in some pages of the book entitled *Shogaku*. This book is a volume printed in the Korean Peninsula in the 18th century. These lines have been noted in order to read Chinese classics like Korean word order. My detailed investigation into *Kakuhitsu* documents makes clear the following three points:

- 1 Chinese classics were read with the help of *Kakuhitsu* in the 18th century.
- 2 Letters or marks added to Chinese classics so as to read these texts were different between in Japan and in Korea.
- 3 Koreans possibly read Chinese classics with the aid of *Kakuhitsu* lines in the 18th century.

Furthermore, I have found many *Kakuhitsu* lines in the ancient books which were printed and published in the Korean Peninsula. I expect that there must have been much more *Kakuhitsu* documents left in the Korean Peninsula. If these documents would be discovered in the future, it might make a great contribution to the investigation into the history of *Kakuhitsu*.